

# 乳幼児のストレス

## 動物触れ合いで減

「てくてく保育園甲府昭和」（昭和町）を運営する人材派遣業「テクノ・ラボ」（同町、藤原信社長）と日本保健医療大（埼玉県）の熊坂隆行教授の研究チームは、動物との触れ合いが乳幼児に与える影響を調べている。これまでの調査で、触れ合う回数の増加に伴いストレスが減る傾向であることが分かった。動物が介在した乳幼児に関する教育研究は報告例がないといい、熊坂教授は「動物との交流が乳幼児にも良い効果をもたらす可能性を示す成果」と話している。

〈植田裕作〉

同保育園は、動物と日常的に触れ合うことで園児の感受性を高めるほか、癒やしの効果を期待して動物介在教育を行っている。調査は0〜2歳児計13人を対象に1〜3月にかけて計7回実施。犬と10分程度触れ合う時間を設け、前後で唾液を採取し、ストレスが少なくなるほど減少する「アミラーゼ」の濃度を測定して変化を調べた。

熊坂教授によると、1回目

の前後ではアミラーゼの濃度が低下した児童の割合は14%にとどまったが、回数を重ねるごとに増加。最大で8割の子どもにストレス軽減が見られた。

「最高」から「最低」まで6段階ある顔のイラストから現在の気分を指さす「フェーススケール」の調査も実施。保育士が乳幼児の表情を見て選択したところ、ほとんどが触れ合いの後に笑顔が増える結果となった。熊坂教授は「動物との継続的な触れ合いにより、乳幼児の精神面にプラスの影響をもたらす可能性がある」とみている。

熊坂教授によると、小学校や幼稚園など3歳以上の子どもを対象にした動物介在教育では精神、身体、社会的な側面から有効とする事例が報告されているが、3歳未満児ではほとんど研究が進んでいない。乳幼児は言語で意思を伝えにくいことなどが要因で、評価手法も確立されていないという。

熊坂教授は「調査、評価方法の妥当性は検証する必要がある。今後も研究を続け、将来的には乳幼児向けの動物介在教育マニュアルを作成し、全国の保育園に示したい」と話している。

## 県内保育施設で大学教授ら調査